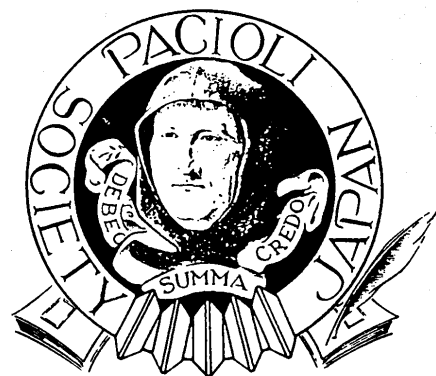


Accounting, Arithmetic & Art Journal



NO.23

The PACIOLI SOCIETY JAPAN

2008. 10

協会ホームページ開設のお知らせ

<http://homepage3.nifty.com/pacioli/>を開いてみてください。「パチョーリとウルビーノ公」(当協会顧問:岩井 敏氏撮影)の画像が現れます。HP を開いた回数、写真集、AAA 誌の各号(本誌 p. 5-6. 参照)に収録した講演録などが表示されます。追々、ホームページの充実を図っていく所存です。メールボタン(Mpacioli@aol.com)でリプレーも出来ます。おためし下さい。

アレクサンダー・アラン・シャンド氏顕彰碑のこと

I 除幕式と法要

箱根・芦ノ湖湖畔、船着場(駅伝広場)近くにある真宗大谷派萬福寺は、鬱蒼とした林を背にして山門の他は木立の内に隠れている。風格のあるどっしりした山門の入り口左手に「箱根学校発祥の地」の案内碑、そして右手に「アラン・シャンド氏 縁の地」と彫られた真新しい石碑が佇んでいる。曰く、

明治の初め、わが国に複式簿記・銀行簿記を教えた恩師

英国人シャンド氏は、明治六年「銀行簿記精法」完成の後

この地に逗留中、旅籠駒にて参歳の長男を亡くす。

童子の墓は当萬福寺にあつたが、昭和五年の北伊豆地震の山津波で埋没。

境内に、シャンド氏の顕彰碑と、再建された童子の墓がある。

【拙注】当時のシャンド夫妻には双子の男女児がいて、その内の男児モンテ一ギュが明治6年8月8日に(疫痢で?)急逝する。帰英したシャンドはロンドンの銀行に勤め、老後は日本生まれの娘と共に自適の生活を送る。1930(昭和5)年4月12日に86歳で亡くなり、ロンドン近郊ブルックウッド墓地に埋葬される。同じ年に山津波でこの男児の墓が埋没した。今年はその口述和訳書『銀行簿記精法』刊行から135周年であり、かつこの男

児逝去の日から135回忌を迎える。

山門から三メートルほど登った高みの本堂の先、林を切り開いて造成した墓地



の一角（12,96 平米：萬福寺提供）に於いて、「アラン・シャンド氏の顕彰碑の除幕式」が行われた。おりしもこの2008年8月8日は北京オリンピック開会式の当日でもあったが、お手伝いに出た萬福寺の檀家さんを含めて50名ほどが集まり、午後一時からの除幕式、再建した童子モンテーギュの墓前勤行、そして本堂に移動しての永代経法要と続き、三時近くにすべてを終え散会した。



杉林を背に左側、15cmほどの基壇の上に横幅67cm×高さ54cmの桜御影石でできたシャンドの子息モンテーギュの墓、ひと際目立つ右側に45cmほどの台座の上に幅174cm×高さ97cmの立派な小松石がシャンド顕彰碑である

前者のバラ輝石が輝く墓石は赤子の肌を思わせるほど美しく、その表面に明治の当初に彫られていた碑文と同一の墓誌名が刻まれている。



**In Loving Remembrance of Montague Shand.
eldest son of Alexander Allan
and Emmeline Christmas Shand,
born 1871, died 8 Aug 1873.**

その裏の墓誌は **2008年8月8日 再建
アラン・シャンドを顕彰する会** とある。

青灰（銀ネズ）色の落ち着いた雰囲気醸す後者の本小松石（神奈川県真鶴産）には **わが国に於ける複式簿記・銀行簿記の教師**

アラン・シャンド顕彰之碑

一天下ノ事會計ヨリ重キハナシ

銀行簿記精法序ヨリ

と刻まれている。

中段の揮毫は大東文化大学書道科教授田中裕昭（日展会員）による。

碑の裏にまわるとシャンド氏を偲ぶ碑建立の経緯が書かれている。すなわち、

Allan Shand は、1844年2月英国の名家に生まれる。1872年明治新政府は国立銀行条例を制定、氏をお雇い外国人として招聘し、銀行・金融諸制度の創設に当らせた。

1873年、銀行簿記書を脱稿、これを翻訳し「銀行簿記精法」として刊行。これは、わが国最初の複式簿記書の原点で「シャンド式簿記」と称せられ、第一国立銀行を嚆矢とし全銀行の統一経理基準となり、また広く企業会計の教典となった。

氏はこの本を脱稿しこの地で静養中に、参歳（さんざい）の長男が急逝し、ここ萬福寺に葬った。1877年任を終え帰英後も、日本の財政界人との友好深く、わが国の近代化に貢献した。

その功績によって財官挙げて顕彰を行ない、また童子の墓も、有志により供養されて来たが、1930年北伊豆地震により童子の墓・寺共に埋没し、爾来80年墓の再建は成らなかつた。氏は、1930年4月86歳で逝去、ロンドン郊外のブルックウッドの森に眠る。

かかる近代日本の国造りの恩人アラン・シャンド氏の功績を忘れず、またこれを次

世代に繋ぎ伝えるため、有志相はかり、童子の眠るこの静寂の地に、これを建立した。

2008年8月8日

アラン・シャンドを顕彰する会



II 顕彰碑建立の経緯

シャンド(1844. 2. 11～1930. 4. 12)の日本における業績やその終焉については西川孝治郎(『日本簿記史談』)と土屋喬雄(『シャンドーわが国銀行上の教師ー』東洋経済新報社 昭和41年)の著作に譲る。ロンドンに帰った氏に対して、日本政府はその恩に報いるべく、何度と無く叙勲がなされた。

明治35年2月勲四等旭日章、同37年7月には英貨六分公債募集の功により勲三等瑞宝章、同39年3月日露戦争中の募債の功により旭日中綬章、同41年12月には勲二等瑞宝章を贈られている。なお、1930年4月30日の英国Morning Post紙は「シティは、国際金融の1つの連携を失なった。故シャンド氏は、日本の銀行・金融界では『日本近代銀行業の発展の父』として、日本では銀行法改正に貢献し、さらに英国では日露戦争中の日本政府の外債募集に尽力した」と弔辞を載せている(北政巳著『国際日本を拓いた人々』同文館 昭和59年 pp. 16～17)。

戦後の1963年に第一銀行90周年記念行事の中で、シャンドの顕彰を行ない、また、68年にはNHKの明治100年記念番組で取り上げているが、しかし、大方の日本人には忘却のかなたの人となっていた(鈴木豊明、センチュリー監査法人社内報『レインボー』1998年8月号 p. 12 参照)。

今回の顕彰碑が建立される経緯について、顕彰式当日に配布された日経CNBCの桐山勝「お雇い外国人、アラン・シャンド」(日本橋閑話 No. 145, 2007. 8. 20)の記事から掻い摘んで叙述してみる。なお、敬称は省略する。

1983年の秋、センチュリー監査法人勤務の鈴木豊明公認会計士が第一勧業銀行ロンドン支店の会計監査に赴いた折のある夕食会でのこと、同僚会計士の石井清之・森重栄らと共に同監査法人の名誉顧問である大東文化大学教授の河野一英から、同地シェフィールド大学に留学中の当時同大助教授の前川邦生が紹介された。

その席で前川は一枚の写真を示して「これが、アラン・シャンドのお墓です。今はまったく手入れする人もいない様子で、雑草に囲まれていて残念です」と話したという。早速、この話はロンドン支店の幹部たちにも伝わり、第一銀行設立時の大恩

人であって、日本の銀行の生みの親とも言える人なので、お墓の世話ができないかということになったという（『レインボー』1998/8No. 35, p. 12）。

2003年11月21日付け日本経済新聞朝刊文化欄に「銀行の師 シャンドの心得—お雇い外国人の教えの見直し、墓を訪ねる」という会計史家周知の記事が載る。筆者はみずほコーポレート銀行欧州駐在役員の佐藤清一郎、彼はロンドン駐在事務所にあった土屋喬雄の著作で初めてシャンドを知り、墓地を彷徨して、「資料に基づき23区を探したが見当たらない。…資料に間違いがあり、実は22区と判明。…雑草で覆われた道無き道を…行くと、地面すれすれの長方形の石枠だけの墓前で足を止めた。」と書いている。

【拙注】ロンドン郊外サレー州南ブルックウッド霊園の墓番号195378がシャンド氏である。シャンド夫人の番号172686も同じところに置かれているところから、前川は「夫人の墓にシャンド氏が一緒に葬られた」と大東文化大学新聞(1984.7.15)で説明している。前川氏は帰国直後に所在番号の相違につき、西川孝治郎の許に伺って、西川がロンドンに駐在していた商社マンに依頼した写真をもとに記述したものであったことが分かった。その折、シャンドの写真銅版や香港および印度時代の簡書などを拝受したとのことである。

前川・鈴木のロンドンでの提案から四半世紀後の07年8月8日に当時の邦人関係者が箱根・萬福寺に集まり、シャンドの子息、シャンド、それにシャンド夫人(死去1913.9.23)の法要を行い、08年の135回忌には墓を再興するというプロジェクトが始まった。

Ⅲ そしてこれから

ロンドンに集った邦人たち、特に前川・鈴木が発起人となって各界に呼びかけて、渋沢栄一記念財団、大原学園、大東文化大学前川ゼミ、租税実務研究会・菊正会、心友会、旧第一勧業銀行関係者、会計人などの協力を求めた結果、9法人117個人から350万円の浄財が集まり、墓石・顕彰碑の購入・設置ができたとのこと、当初の目標が150万円であったにもかかわらず、遙かに多くの協力を得られたのはシャンド氏のこの国に於ける貢献と志を同じくした方々の並々ならぬ努力である。このプロジェクトを快諾し、墓所を無償で提供した真宗大谷派・萬福寺住職小笠原聡氏(神奈川県足柄下郡箱根町箱根228)のご好意が嬉しい。また、町縁の名士としてシャンド碑を歓迎した箱根町町長と町議会、町民にも感謝したい。なお、同寺を訪れる人の便宜を図って、発起人たちが持ち寄った復刻本『銀行簿記精法』を始め、明治初期の簿記書、シャンドに関する著作物が寄贈・備置されている。

次に目指すプロジェクトがあるならば、英国にある墓所の修復であろう。これば次世代の方々の課題であって、シャンド氏が播いたこの国の金融・会計の恩恵を受けてきた方々、特に会計人の協力が必要である。

会計史家西川孝治郎は、シャンドの業績を詳しく調べて、その『日本簿記史談』のなかで、「今の万福寺は湯河原街道を湖岸から少し入ったところにあるが、昔はもつと奥にあり、墓はさらに後にあった。私はあの場所に『シャンド遺跡』とでも記した標柱を建ててもらいたいと思う。また将来あそこを掘る場合には、注意し墓石を回収し、復元されるよう希望している」(『日本簿記史談』p.123,)と締めくくっておられた。まさに、そのことが、四半世紀前にロンドンに集結した邦人たちの志から始まり、西川孝治郎も想像しなかった立派な碑が完成したのである。おそらく、会計人の記念



晩年のシャンド

土屋喬雄著『シャンドーわが国銀行上の教師ー』より

碑ではイタリア・サンセポルクロにある白亜のパチョーリ像がとに有名であるが、この国ではシャンド顕彰之碑が初めてとなる。前川は言う、「わが国の若い者にいつまでも伝え、簿記会計の勉学者や将来、職業会計人を目指す人々によき守り神となれば幸いである」（『税経セミナー』2007年12月号 p.69）と。願わくばつまでも「井戸を掘った人」を忘れさせない会計教育が必要ではなかろうか。

（文責：三代川正秀）



茂木虎雄先生ご逝去

平成20年5月15日、長らく加療されていた立教大学名誉教授・元大東文化大学教授の茂木先生が急逝(享年81才)されました。同月18日、ご自宅近くの聖ペテロ教会に多くの会計学関係者が集い、先生とのお別れをいたしました。ご冥福をお祈り申し上げます。

先生には本協会の創立にご尽力をいただき、顧問をしばらく勤められ、第1回並び14回フォーラムでご講演もいただきました。業績・お人柄については次の文献をご覧ください。

立教大学『経済学研究』茂木虎雄教授記念号1992年年10月(第46巻2号)

日本会計史学会『わが国会計史研究の現在・過去・未来に関する研究』(2003年8月)

笠井昭次著『三十年一日一百花誰が為に開く一』慶應義塾大学出版会(2004年3月)



Accounting Arithmetic Art Journal 総目次

No.1(1992/1) ; ルカ・パチョーリルネサンスの影の英雄ー/会員名簿/日本パチョーリ協会会員規約

No.2(1992/3) : シアトル大学パチョーリ・ソサイエティーよりの祝辞/会員名簿

No.3(1992/11) : 第6回会計史家国際会議開催される/会員名簿/茂木虎雄「わが国におけるパチョーリ研究の歴史」/この絵の行方を知りませんか?

No.4(1993/5) : 「モナリザを描くダ・ヴィンチ」その後/中西旭「会計の祖としてのルカ・パチョーリ」/戸田礼子「イタリア旅行記1992年晩秋」

No.5(1994/3) : 第4回フォーラム開催のお知らせ/1494~1994: Quincentennial Celebration/シアトル大学パチョーリ協会/鈴木一道「第二回フォーラム大会記(江村捻 'No. Royal Rord')」/会員名簿

No.6(1994/10) : 第五回フォーラム開催のお知らせ/「スμμα」出版五百年祭/久野秀男「パチョーリ以降: 「簿記」とは何だったか」

No.7(1995/3) : 本田一二「人体解剖と梅毒と鉄砲とーパチョーリの時代ー」

No.8(1995/11) : 第七回フォーラム開催のお知らせ/ハーウッド簿記・会計学文献コレクション/東田全義「インキナプラとしてのパチョーリ『スμμα』」

No.9(1996/5) : 第8回フォーラムのお知らせ/第7回会計史家国際会議/徳橋曜

「中世末期の公証人と商人文化について－『スムマ』の生まれた文化的環境－」／パチョーリ関係文献抄

- No.10 (1996/12)：第9回フォーラムのお知らせ／第7回会計史家国際会議を終えて／岩井敏「ルカ・パチョーリをめぐる人びと」
- No.11 (1998/5)：片岡泰彦「パチョーリ簿記論翻訳書の探求」
- No.12 (1998/10)：第10回フォーラムのお知らせ／文献案内／三代川正秀「P・ガーナからの手紙」／ハーウッド・コレクション、久留米大学に納入／中西旭先生イタリア共和国「コマンドトーレ」叙勲
- No.13 (1998/4)：第11回フォーラム開催のお知らせ／「スムマ」がやって来る／斎藤寛海「中世後期のイタリア商業」／片岡泰彦「シチリアの『会計史国際会議』参加記」
- No.14(1999/9)：第8回会計史家国際会議のスケジュール／三浦伸夫「パチョーリと数学」／AAA Journal 総目次
- No.15(2000/5)：第8回会計史家国際会議／林信夫「ローマにおける『銀行業』」
- No.16(2002/4)：会計史家国際会議開催について／イタリア文化講演会の開催／第13回フォーラムの記事未収録について／茂木虎雄「シモン・スティヒンの商人簿記論の構造と勘定学説史の展開」
- No.17(2002/11)：イタリア・ルネサンスの商人に宛てた贈物／第16回フォーラム予告／雪嶋宏一「パチョーリ『スムマ』の書誌学的位置付け」／片岡泰彦「2003年シエナ会計史国際会議について」
- No.18(2004/2)：第10回会計史家国際会議開催について／片岡泰彦「第3回会計史国際会議に参加して」／(書評)片岡泰彦「斎藤寛海著『中世後期イタリアの商業と都市』」
- No.19(2005/8)：ハーウッド会計稀覯本マイクロ集成の刊行／平伊佐雄「12世紀から14世紀におけるドイツの修道院の家政について」
- No.20(2007/2)：第19回フォーラム開催について／『スムマ』初版と二版／田中孝治「請負代官の会計と決算書について」
- No.21(2008/5)：岩井敏先生 本会顧問にお迎え／アラン・シャンド氏顕彰活動／橋本寿哉「メディチ銀行の会計諸表」
- No.22(2007/12)：第20回日本パチョーリ協会フォーラムの開催／世話役冥利につきること／三浦敦子「1400年代のヴェネツィアの経済と社会」

私ども日本パチョーリ協会はルカ・パチョーリの功績を偲び、会計史、数学史、美術史などに興味をもたれる方々の研究と親睦を目的とする会合です。興味のある方は、世話人にお声をかけてくださればご案内申し上げます。

顧問：岩井 敏
世話人：岡本治雄 片岡泰彦 佐々木重人
鈴木一道 種田勝正 三代川正秀

The **IPACIOLI** **SOCIETY** **JAPAN**

日本パチョーリ協会 〒112-8585

The Institute for Management and 東京都文京区小日向3-4-14 拓殖大学 商学部 三代川 研究室 TEL.03-3947-9014
<http://homepage3.nifty.com./pacioli/>